

太宰治「走れメロス」校訂

近藤 周吾*

A Revised Edition of 'Run, Möros, Run' by Osamu Dazai

KONDO Shugo*

緒言

周知のとおり、太宰治「走れメロス」は、非常に広範な読者層を有する聖典^{カノン}である。文学研究や国語教育の現場はもとより、著作権がきたということもあって創作の現場でもたえず影響力を行使しつづけるテキストであるといえる。その意味でも、本文の整備という問題が須要であることは、ここに贅言するまでもない。ところが、子細にしらべていくと気がつくことなのだが、検定教科書をふくめた流布本のたぐいはいうにおよばず、全集のすぐれた本文校訂においても、なお改善の余地がのこされているようなのである。

このような現状にかんがみて、ここであらたに「走れメロス」の本文校訂をこころみることにした。すでに拙稿「走れメロス」評釈(一)「(山内祥史編『太宰治研究』15) 和泉書院 二〇〇七年六月」(連載継続中)に公表した校異等の成果をふまえ、従前の校訂のよいところをのこしながら、ひとつひとつ校訂してゆき、本文のかたちにしてみた。かきよによって確実に参看された典拠や同一のかきよによるテキストなどにもめをくばり、なるべく恣意を排し、あたうかぎり精確な本文となるようこころがけた。それゆえにかつての校訂のごとく一種類の底本に依拠・還元しようとするのではなく、そのつど、つまり部分ごとに最良の本文を取捨選択するという方法をとることになった。結果として、初出とも初刊とも再刊ともちがう、あらたな本文がたちあらわれることになった。

全体としての同一性を優先するのではなくディテールを重視した点において、あるいはそれぞれの本文のよさを合成した点において、さらには信頼できる典拠をも参照

した点において、近藤版「走れメロス」は、従来のいかなる本文ともことなるユニークかつ信頼できる本文となったのではないかと自負するところである。とはいっても、生来の粗忽ゆえに誤謬や齟齬のたぐいもあるのではないかとひそかにおそれている。ここに諸賢のご批評をこうゆえんである。

この贅訂によって、あらためて「走れメロス」の本文の問題に関心があつまるのであれば、さいわいである。

【凡例】

一 今回は作者が生存していた時期に刊行された三種の諸本を合成するため、特定の底本はさだめていない。三種の諸本とは、左記に所収の本文のことをさす。

1 『新潮』(第三十七年第五号通巻四二六号 昭和十五年五月一日)

2 太宰治『女の決闘』(河出書房 昭和十五年六月一日)

3 太宰治『富嶽百景』(新潮社 昭和十八年一月一日) ^ 昭和名作選集

(28) v

このうち、主として1と2を使用した。3を使用するに躊躇する理由は、かきの意図のほかに、叢書であるために編集者の意図がおおく混入している可能性があり、また誤植もあるからである。作者の没後すぐに刊行された、

4 太宰治『水仙』(文藝春秋新社 昭和二十三年七月一日)

については、1と3にみられぬ決定的な差異も散見されるが、精査の結果、誤植がおおく信頼にたたいしなものともみなして、ここでは参照することをよしとしなかった。なお、本文の親疎関係からいえば、4は3にちかいかいということも、この機会に付言しておきたい。

二 本文作成に際しては、かなづかいは旧のものによったが、漢字については新字体・通用字体によった。ただし、「佞」とするのは3の誤植に端を発したものとみなして「佞」を採用することにした。この経緯については、左記の拙稿にのべておいた。

A 近藤周吾「走れメロス」評釈(三)「(山内祥史編『太宰治研究』17 和泉書院 二〇〇九年八月)

* 一般教養科

e-mail: kondo@nc-toyama.ac.jp

(平成二十二年四月二十八日受付)

B 近藤周吾「太宰治と四字熟語」(『富山商船高等専門学校研究集録』第42号 二〇〇九年八月)

三 「走れメロス」の典拠としては、もっとも確実視される左記のみを参照した。

イ 小栗孝則訳『新編シラー詩抄』(改造社 昭和十二年七月)

これによって、たとえば「ディオニス」や「セリヌンティウス」の表記が1の誤植もしくはあやまりである蓋然性がたかいと判断した。ここで「ディオニス」「セリヌンティウス」という表記にした理由である。

四 校訂に際しては、先行する種々の全集校訂本文を参照したが、なかでも左記を参考にした。学恩に深謝する。

5 第一〇次筑摩書房版『太宰治全集第三卷』(一九八九年一〇月)

■校訂本文

走れメロス

太宰 治

メロスは激怒した。必ず、かの邪智暴虐の王を除かなければならぬと決意した。メロスには政治がわからぬ。メロスは、村の牧人である。笛を吹き、羊と遊んで暮して来た。けれども邪悪に対しては、人一倍に敏感であった。けふ未明メロスは村を出発し、野を越え山越え、十里はなれた此のシラクスの市にやつて来た。メロスには父も、母も無い。女房も無い。十六の、内気な妹と二人暮しだ。この妹は、村の或る律気な一牧人を、近々、花婿として迎へる事になつてゐた。結婚式も間近かなのである。メロスは、それゆゑ、花嫁の衣裳やら祝宴の御馳走やらを買ひに、はるばる市にやつて来たのだ。先づ、その品々を買ひ集め、それから都の大路をぶらぶら歩いた。メロスには竹馬の友があつた。セリヌンティウスである。今は此のシラクスの市で、石工をしてゐる。その友を、これから訪ねてみるつもりなのだ。久しく逢はなかつたのだから、訪ねて行くのが楽しみである。歩いてゐるうちにメロスは、まちの様子を怪しく思つた。ひっそりしてゐる。もう既に日も落ちて、まちの暗いのは当りまへだが、けれども、なんだか、夜のせむばかりでは無く、市全体が、やけに寂しい。のんきなメロスも、だんだん不安になつて来た。路で逢つた若い衆をつかまへて、何かあつたのか、二年まへに此の市に来たときは、夜でも皆が歌をうたつて、まちは賑やかであつた筈だが、と質問した。若い衆は、首を振つて答へなかつた。しばらく歩いて老爺に逢ひ、こんどはもつと、語勢を強くして質問した。老爺は答へなかつた。メロスは両手で老爺のからだをゆすぶつて質問を重ねた。老爺は、あたりをはばかりる低声で、わづか答へた。

「王様は、人を殺します。」

「なぜ殺すのだ。」

「悪心を抱いてゐる、といふのですが、誰もそんな、悪心を持つては居りませぬ。」

「たくさんの人を殺したのか。」

「はい、はじめは王様の妹婿さまを。それから、御自身のお世嗣を。それから、妹さ

まを。それから、妹さまの御子さまを。それから、皇后さまを。それから、賢臣のアレキス様を。」

「おどろいた。国王は乱心か。」

「いいえ、乱心ではございません。人を、信ずる事が出来ぬ、といふのです。このころは、臣下の心をも、お疑ひになり、少しく派手な暮しをしてゐる者には、人質ひとりづつ差し出すことを命じて居ります。御命令を拒めば十字架にかけられて、殺されます。けふは、六人殺されました。」

聞いて、メロスは激怒した。「呆れた王だ。生かして置けぬ。」

メロスは、単純な男であつた。買ひ物を、背負つたままで、のそのそ王城にはひつて行つた。たちまち彼は、巡邏の警吏に捕縛された。調べられて、メロスの懐中からは短剣が出て来たので、騒ぎが大きくなつてしまつた。メロスは、王の前に引き出された。

「この短刀で何をするつもりであつたか。言へ！」暴君ディオニスは静かに、けれども威厳を以て問ひつめた。その王の顔は蒼白で、眉間の皺は、刻み込まれたやうに深かつた。

「市を暴君の手から救ふのだ。」とメロスは悪びれずに答へた。

「おまへがか？」王は、憫笑した。「仕方の無いやつぢや。おまへなどには、わしの孤独がわからぬ。」

「言ふな！」とメロスは、いきり立つて反駁した。「人の心を疑ふのは、最も恥づべき悪徳だ。王は、民の忠誠をさへ疑つて居られる。」

「疑ふのが、正当の心構へなのだ、わしに教へてくれたのは、おまへたちだ。人の心は、あてにならない。人間は、もともと私慾のかたまりさ。信じては、ならぬ。」暴君は落着いて呟き、ほつと溜息をついた。「わしだつて、平和を望んでゐるのだが。」

「なんの為の平和だ。自分の地位を守る為か。」こんどはメロスが嘲笑した。「罪の無い人を殺して、何が平和だ。」

「だまれ、下賤の者。」王は、さつと顔を挙げて報いた。「口では、どんな清らかな事でも言へる。わしには、人の腹綿の奥底が見え透いてならぬ。おまへだつて、いまに、磔になつてから、泣いて詫びたつて聞かぬぞ。」

「ああ、王は恠巧だ。自惚れてゐるがよい。私は、ちゃんと死ぬる覚悟で居るのに、命乞ひなど決してしない。ただ、——」と言ひかけて、メロスは足もとに視線を落し

瞬時ためらひ、「ただ、私に情をかけたつもりなら、処刑までに三日間の日限を与へて下さい。たつた一人の妹に、亭主を持たせてやりたいのです。三日のうちに、私は村で結婚式を挙げさせ、必ず、ここへ帰つて来ます。」

「ばかな。」と暴君は、嘎れた声で低く笑つた。「とんでもない嘘を言ふわい。逃がした小鳥が帰つて来るといふのか。」

「さうです。帰つてくるのです。」メロスは必死で言ひ張つた。「私は約束を守ります。私を三日間だけ許して下さい。妹が、私の帰りを待つてゐるのだ。そんなに私を信じられないならば、よろしい、この市にセリヌンティウスといふ石工がゐます。私の無二の友人だ。あれを、人質としてここに置いて行かう。私が逃げてしまつて、三日目の日暮まで、ここに帰つて来なかつたら、あの友人を絞め殺して下さい。たのむ。さうして下さい。」

それを聞いて王は、残虐な気持で、そつと北叟笑んだ。生意気なことを言ふわい。どうせ帰つて来ないにきまつてゐる。この嘘つきに騙された振りして、放してやるのも面白い。さうして身代りの男を、三日目に殺してやるのも気味がいい。人は、これだから信じられぬと、わしは悲しい顔して、その身代りの男を、三日目に殺してやるのも気味がいい。人は、これだから信じられぬと、わしは悲しい顔して、その身代りの男を磔刑に処してやるのだ。世の中の、正直者とかいふ奴輩にうんと見せつけてやりたいものさ。

「願ひを、聞いた。その身代りを呼ぶがよい。三日目には日没までに帰つて来い。おくれたら、その身代りを、きつと殺すぞ。ちよつとだけおくれ来て来るがいい。おまへの罪は、永遠にゆるしてやらうぞ。」

「なに、何をおつしやる。」

「はは、いのちが大事だつたら、おくれ来て来い。おまへの心は、わかつてゐるぞ。」

メロスは口惜しく、地団駄踏んだ。ものも言ひたくなつた。

竹馬の友、セリヌンティウスは、深夜、王城に召された。暴君ディオニスの面前で、佳き友と佳き友は、二年ぶりで相逢うた。メロスは、友に一切の事情を語つた。セリヌンティウスは無言で首肯き、メロスをひと抱きしめた。友と友の間は、それでよかつた。セリヌンティウスは、縄打たれた。メロスは、すぐに出発した。初夏、満天の星である。

メロスはその夜、一睡もせず十里の路を急ぎに急いで、村へ到着したのは、翌る日

の午前、陽は既に高く昇つて、村人たちは野に出て仕事をはじめてゐた。メロスの十六の妹も、けふは兄の代りに羊群の番をしてゐた。よろめいて歩いて来る兄の、疲労困憊の姿を見つけて驚いた。さうして、うるさく兄に質問を浴びせた。

「なんでも無い。」メロスは無理に笑はうと努めた。「市に用事を残して来た。またすぐ市に行かなければならぬ。あす、おまへの結婚式を挙げる。早いほうがよからう。」妹は頬をあからめた。

「うれしいか。綺麗な衣裳も買つて来た。さあ、これから行つて、村の人たちに知らせて来い。結婚式は、あすだ。」

メロスは、また、よろよると歩き出し、家へ帰つて神々の祭壇を飾り、祝宴の席を調べ、間もなく床に倒れ伏し、呼吸もせぬくらゐの深い眠りに落ちてしまつた。

眼が覚めたのは夜だつた。メロスは起きてすぐ、花婿の家を訪れた。さうして、少し事情があるから、結婚式を明日にしてくれ、と頼んだ。婿の牧人は驚き、それはいけない、こちらには未だ何の仕度も出来てゐない、葡萄の季節まで待つてくれ、と答へた。メロスは、待つことは出来ぬ、どうか明日にしてくれ給へ、と更に押しつた。婿の牧人も頑強であつた。なかなか承諾してくれない。夜明けまで議論をつづけて、やつと、どうにか婿をなだめ、すかして、説き伏せた。結婚式は、真昼に行はれた。新郎新婦の、神々への宣誓が済んだころ、黒雲が空を覆ひ、ぼつりぼつり雨が降り出し、やがて車軸を流すやうな大雨となつた。祝宴に列席してゐた村人たちは、何か不吉なものを感じたが、それでも、めいめい気持を引きさて、狭い家の中で、むんむん蒸し暑いのも怖へ、陽気に歌をうたひ、手を拍つた。メロスも、満面に喜色を湛へ、しばらくは、王とのあの約束をさへ忘れてゐた。祝宴は、夜に入つていよいよ乱れ華やかになり、人々は、外の豪雨を全く気にしなくなつた。メロスは、一生このままここにゐたい、と思つた。この佳い人々と生涯暮して行きたいと願つたが、いまは、自分のからだで、自分のものではない。ままたらぬ事である。メロスは、わが身に鞭打ち、つひに出発を決意した。あすの日没までには、まだ十分の時が在る。ちよつと一眠りして、それからすぐに出発しよう、と考へた。その頃には、雨も小降りになつてゐよう。少しでも永くこの家に愚図愚図とどまつてゐたかつた。メロスほどの男にも、やはり未練の情といふものは在る。今宵呆然、歓喜に酔つてゐるらしい花嫁に近寄り、

「おめでたう。私は疲れてしまつたから、ちよつとご免かうむつて眠りたい。眼が覚

めたら、すぐに市に出かける。大切な用事があるのだ。私がゐなくても、もうおまへには優しい亭主があるのだから、決して寂しい事は無い。おまへの兄の、一ばんきらひなもの、人を疑ふ事と、それから、嘘をつく事だ。おまへも、それは、知つてゐるね。亭主との間に、どんな秘密でも作つてはならぬ。おまへに言ひたいのは、それだけだ。おまへの兄は、たぶん偉い男なのだから、おまへもその誇りを持つてゐろ。」

花嫁は、夢見心地で首肯した。メロスは、それから花婿の肩をたたいて、「仕度の無いのはお互さまさ。私の家にも、宝といつては、妹と羊だけだ。他には、何も無い。全部あげよう。もう一つ、メロスの弟になつたことを誇つてくれ。」

花婿は揉み手して、てれてゐた。メロスは笑つて村人たちにも会釈して、宴席から立ち去り、羊小屋にもぐり込んで、死んだやうに深く眠つた。

眼が覚めたのは翌る日の薄明の頃である。メロスは跳ね起き、南無三、寝過したか、いや、まだまだ大丈夫、これからすぐに出発すれば、約束の刻限までには十分間に合ふ。けふは是非とも、あの王に、人の信実の存するところを見せてやらう。さうして笑つて磔の台に上つてやる。メロスは、悠々と身仕度をはじめた。雨も、いくぶん小降りになつてゐる様子である。身仕度は出来た。さて、メロスは、ぶるんと両腕を大きく振つて、雨中、矢の如く走り出た。

私は、今宵、殺される。殺される為に走るのだ。身代りの友を救ふ為に走るのだ。王の奸佞邪智を打ち破る為に走るのだ。走らなければならぬ。さうして、私は殺される。若い時から名譽を守れ。さらば、ふるさと。若いメロスは、つらかつた。幾度か、立ちどまりさうになつた。えい、えいと大声挙げて自身を叱りながら走つた。村を出て、野を横切り、森をくぐり抜け、隣村に着いた頃には、雨も止み、日は高く昇つて、そろそろ暑くなつて来た。メロスは額の汗をこぶしで払ひ、ここまで来れば大丈夫、もはや故郷への未練は無い。妹たちは、きつと佳い夫婦になるだらう。私には、いま、なんの気も無い筈だ。まつすぐに王城に行き着けば、それでよいのだ。そんなに急ぐ必要も無い。ゆつくり歩かう、と持ちまへの呑気さを取り返し、好きな小歌をいい声で歌ひ出した。ぶらぶら歩いて二里行き三里行き、そろそろ全里程の半ばに到達した頃、降つて湧いた災難、メロスの足は、はたと、とまつた。見よ、前方の川を。きのふの豪雨で山の水源地は氾濫し、濁流滔々と下流に集り、猛勢一挙に橋を破壊し、どうどうと響きをあげる激流が、木葉微塵に橋桁を跳ね飛ばしてゐた。彼は茫然と、立ちすくんだ。あちこちと眺めまはし、また、声を限りに呼びたててみたが、繫舟は

残らず浪に浚はれて影なく、渡守りの姿も見えない。流れはいよいよ、ふくれ上り、海のやうになつてゐる。メロスは川岸にうづくまり、男泣きに泣きながらゼウスに手を挙げて哀願した。「ああ、鎮めたまへ、荒れ狂ふ流れを！ 時は刻々に過ぎて行きます。太陽も既に真昼時です。あれが沈んでしまはぬうちに、王城に行き着くことが出来なかつたら、あの佳い友達が、私のために死ぬのです。」

濁流は、メロスの叫びをせせら笑ふ如く、ますます激しく躍り狂ふ。浪は浪を呑み、捲き、煽り立て、さうして時は、刻一刻と消えて行く。今はメロスも覚悟した。泳ぎ切るより他に無い。ああ、神々も照覧あれ！ 濁流にも負けぬ愛と誠の偉大な力を、いまこそ發揮して見せる。メロスは、ざんぶと流れに飛び込み、百匹の大蛇のやうにのた打ち荒れ狂ふ浪を相手に、必死の闘争を開始した。満身の力を腕にこめて、押し寄せ渦巻き引きずる流れを、なんのこれしきと掻きわけ掻きわけ、めくらめつぼう獅子奮迅の人の子の姿には、神も哀れと思つたか、つひに憐愍を垂れてくれた。押し流されつつも、見事、対岸の樹木の幹に、すがりつく事が出来たのである。ありがたい。メロスは馬のやうに大きな胸震ひを一つして、すぐにまた先きを急いだ。一刻といへども、むだには出来ない。陽は既に西に傾きかけてゐる。ぜいぜい荒い呼吸をしながら峠をのぼり、のぼり切つて、ほつとした時、突然、目の前に一隊の山賊が躍り出た。「待て。」

「何をやるのだ。私は陽の沈まぬうちに王城へ行かなければならぬ。放せ。」

「どっこい放さぬ。持ちもの全部を置いて行け。」

「私にはいのちの他には何も無い。その、たつた一つの命も、これから王にくれてやるのだ。」

「その、いのちが欲しいのだ。」

「さては、王の命令で、ここで私を待ち伏せしてゐたのだな。」

山賊たちは、ものも言はず一斉に棍棒を振り挙げた。メロスはひよいと、からだを折り曲げ、飛鳥の如く身近かの一人に襲ひかかり、その棍棒を奪ひ取つて、

「気の毒だが、正義のためだ！」と猛然一撃、たちまち三人を殴り倒し、残る者のひるむ隙に、さつさと走つて峠を下つた。一気に峠を駆け降りたが、流石に疲労し、折から午後の灼熱の太陽がまともに、かつと照つて来て、メロスは幾度となく眩暈を感じ、これではならぬ、と気を取り直しては、よろよろ二、三步あるいて、つひに、がくりと膝を折つた。立ち上る事が出来ぬのだ。天を仰いで、くやし泣きに泣き出した。

ああ、あ、濁流を泳ぎ切り、山賊を三人も撃ち倒し韋駄天、ここまで突破して来たメロスよ。真の勇者、メロスよ。今、ここで、疲れ切つて動けなくなるとは情無い。愛する友は、おまへを信じたばかりに、やがて殺されなければならぬ。おまへは、稀代の不信の人間、まさしく王の思ふ壺だぞ、と自分を叱つてみるのだが、全身萎えて、もはや芋虫ほどにも前進かなはぬ。路傍の草原にごろりと寝ころがった。身体疲労すれば、精神も共にやられる。もう、どうでもいいといふ、勇者に不似合ひな不貞腐れた根性が、心の隅に巣喰つた。私は、これほど努力したのだ。約束を破る心は、みぢんも無かつた。神も照覧、私は精一ぱいに努めて来たのだ。動けなくなるまで走つて来たのだ。私は不信の徒では無い。ああ、できる事なら私の胸を截ち割つて、真紅の心臓をお目に掛けたい。愛と信実の血液だけで動いてゐるこの心臓を見せてやりたい。けれども私は、この大事な時に、精も根も尽きたのだ。私は、よくよく不幸な男だ。私は、きつと笑はれる。私の一家も笑はれる。私は友を欺いた。途中で倒れるのは、はじめから何もしないのと同じ事だ。ああ、もう、どうでもいい。これが私の定つた運命なのかも知れない。セリヌンティウスよ、ゆるしてくれ。君は、いつでも私を信じた。私も君を、欺かなかつた。私たちは、本当に佳い友と友であつたのだ。いちどだつて、暗い疑惑の雲を、お互ひ胸に宿したことは無かつた。いまだつて、君は私を無心に待つてゐるだらう。ああ、待つてゐるだらう。ありがたう、セリヌンティウス。よくも私を信じてくれた。それを思へば、たまらない。友と友の間の信実は、この世で一ばん誇るべき宝なのだから。セリヌンティウス、私は走つたのだ。君を欺くつもりは、みぢんも無かつた。信じてくれ！ 私は急ぎに急いでここまで来たのだ。濁流を突破した。山賊の囲みからも、するりと抜けて一気に峠を駆け降りて来たのだ。私だから、出来たのだよ。ああ、この上、私に望み給ふな。放つて置いてくれ。どうでも、いいのだ。私は負けたのだ。だから無い。笑つてくれ。王は私に、ちよつとおくれて来い、と耳打ちした。おくれたら、身代りを殺して、私を助けてくれると約束した。私は王の卑劣を憎んだ。けれども、今になつてみると、私は王の言ふままになつてゐる。私は、おかれて行くだらう。王は、ひとり合点して私を笑ひ、さうして事も無く私を放免するだらう。さうなつたら、私は、死ぬよりつらい。私は、永遠に裏切者だ。地上で最も、不名誉の人種だ。セリヌンティウスよ、私も死ぬぞ。君と一緒に死なせてくれ。君だけは私を信じてくれるにちがひ無い。いや、それも私の、ひとりよがりか？ ああ、もういつそ、悪徳者として生き伸びてやらうか。村には私の

家が在る。羊も居る。妹夫婦は、まさか私を村から追ひ出すやうな事はしないだらう。正義だの、信実だの、愛だの、考へてみれば、くだらない。人を殺して自分が生きる。それが人間世界の定法ではなかつたか。ああ、何もかも、ばかばかしい。私は、醜い裏切り者だ。どうとも、勝手にするがよい。やんぬる哉。——四肢を投げ出して、うとうと、まどろんでしまった。

ふと耳に、潺潺、水の流れる音が聞えた。そつと頭をもたげ、息を呑んで耳をすました。すぐ足もとで、水が流れてゐるらしい。よろよろ起き上つて、見ると、岩の裂目から滾々と、何か小さく囁きながら清水が湧き出でゐるのである。その泉に吸ひ込まれるやうにメロスは身をかがめた。水を両手で掬つて、一くち飲んだ。ほうと長い溜息が出て、夢から覚めたやうな気がした。歩ける。行かう。肉体の疲労恢復と共に、わづかながら希望が生れた。義務遂行の希望である。わが身を殺して、名誉を守る希望である。斜陽は赤い光を、樹々の葉に投じ、葉も枝も燃えるばかりに輝いてゐる。日没までには、まだ間がある。私を、待つてゐる人があるのだ。少しも疑はず、静かに期待してくれてゐる人があるのだ。私は、信じられてゐる。私の命なぞは、問題ではない。死んでお詫び、などと気のいい事は言つて居られぬ。私は、信頼に報いなければならぬ。いまはただその一事だ。走れ！メロス。

私は信頼されてゐる。私は信頼されてゐる。先刻の、あの悪魔の囁きは、あれは夢だ。悪い夢だ。忘れてしまへ。五臓が疲れてゐるときは、ふいとあんな悪い夢を見るものだ。メロス、おまへの恥ではない。やはり、おまへは真の勇者だ。再び立つて走れるやうになつたではないか。ありがたい！私は、正義の士として死ぬ事が出来るぞ。ああ、陽が沈む。ずんずん沈む。待つてくれ、ゼウスよ。私は生れた時から正直な男であつた。正直な男のままにして死なせて下さい。

路行く人を押しつけ、跳ねとばし、メロスは黒い風のやうに走つた。野原で酒宴の、その宴席のまつただ中を駆け抜け、酒宴の人たちを仰天させ、犬を蹴とばし、小川を飛び越え、少しづつ沈んでゆく太陽の、十倍も早く走つた。一団の旅人と颯つとすれちがつた瞬間、不吉な会話を小耳にはさんだ。「いまごろは、あの男も、磔にかかつてゐるよ。」ああ、その男、その男のために私は、いまこんなに走つてゐるのだ。その男を死なせてはならない。急げ、メロス。おかれてはならぬ。愛と誠の力を、いまこそ知らせてやるがよい。風態なんかは、どうでもいい。メロスは、いまは、ほとんど全裸体であつた。呼吸も出来ず、二度、三度、口から血が噴き出た。見える。はる

か向ふに小さく、シラクスの市の塔楼が見える。塔楼は、夕陽を受けてきらきら光つてゐる。

「ああ、メロス様。」うめくやうな声が、風と共に聞えた。

「誰だ。」メロスは走りながら尋ねた。

「フィロストラトスでございます。貴方のお友達セリヌンティウス様の弟子でございます。」その若い石工も、メロスの後について走りながら叫んだ。「もう、駄目でございます。むだでございます。走るの、やめて下さい。もう、あの方をお助けになることは出来ません。」

「いや、まだ陽は沈まぬ。」

「ちやうど今、あの方が死刑になるところです。ああ、あなたは遅かつた。おうらみ申します。ほんの少し、もうちよつとでも、早かつたなら！」

「いや、まだ陽は沈まぬ。」メロスは胸の張り裂ける思ひで、赤く大きい夕陽ばかりを見つめてゐた。走るより他は無い。

「やめて下さい。走るの、やめて下さい。いまはご自分のお命が大事です。あの方は、あなたを信じて居りました。刑場に引き出されても、平気でゐました。王様が、さんざんあの方をからかつても、メロスは来ます、とだけ答へ、強い信念を持ちつけてゐる様子でございました。」

「それだから、走るのだ。信じられてゐるから走るのだ。間に合ふ、間に合はぬは問題でないのだ。人の命も問題でないのだ。私は、なんだか、もつと恐ろしく大きいもの為に走つてゐるのだ。ついて来い！フィロストラトス。」

「ああ、あなたは気が狂つたか。それでは、うんと走るがいい。ひよつとしたら、間に合はぬものでもない。走るがいい。」

言ふにや及ぶ。まだ陽は沈まぬ。最後の死力を尽して、メロスは走つた。メロスの頭は、からつぽだ。何一つ考へていない。ただ、わけのわからぬ大きな力にひきずられて走つた。陽は、ゆらゆら地平線に没し、まさに最後の一片の残光も、消えようとした時、メロスは疾風の如く刑場に突入した。間に合つた。

「待て。その人を殺してはならぬ。メロスが帰つて来た。約束のとほり、いま、帰つて来た。」と大声で刑場の群衆にむかつて叫んだつもりであつたが、喉がつぶれて噎れた声が幽かに出たばかり、群衆は、ひとりとして彼の到着に気がつかない。すでに磔の柱が高々と立てられ、縄を打たれたセリヌンティウスは、徐々に釣り上げられて

ゆく。メロスはそれを目撃して最後の勇、先刻、濁流を泳いだやうに群衆を掻きわけ、掻きわけ、

「私だ、刑吏！ 殺されるのは、私だ。メロスだ。彼を人質にした私は、ここにゐる！」と、かすれた声で精一ぱいに叫びながら、つひに礫台に昇り、釣り上げられてゆく友の両足に、齧りついた。群衆は、どよめいた。あつぱれ。ゆるせ、と口々にわめいた。セリヌンティウスの縄は、ほどかれたのである。

「セリヌンティウス。」メロスは眼に涙を浮べて言った。「私を殴れ。ちから一ぱいに頬を殴れ。私は、途中で一度、悪い夢を見た。君が若し私を殴ってくれなかつたら、私は君と抱擁する資格さへ無いのだ。殴れ。」

セリヌンティウスは、すべてを察した様子で首肯き、刑場一ぱいに鳴り響くほど音高くメロスの右頬を殴った。殴つてから優しく微笑み、

「メロス、私を殴れ。同じくらゐ音高く私の頬を殴れ。私はこの三日の間、たつた一度だけ、ちらと君を疑った。生れて、はじめて君を疑った。君が私を殴ってくれなければ、私は君と抱擁できない。」

メロスは腕に唸りをつけてセリヌンティウスの頬を殴った。

「ありがたう、友よ。」二人同時に言ひ、ひとと抱き合ひ、それから嬉し泣きにおいておい声を放つて泣いた。

群衆の中からも、歎歎の音が聞えた。暴君ディオニス、群衆の背後から二人の様子を、まじまじと見つめてゐるが、やがて静かに二人に近づき、顔をあからめて、かう言った。

「おまへの望みは叶つたぞ。おまへらは、わしの心に勝つたのだ。信実とは、決して空虚な妄想ではなかつた。どうか、わしをも仲間に入れてくれまいか。どうか、わしの願ひを聞き入れて、おまへの仲間の一人にしてほしい。」

どつと群衆の間に、歓声が起つた。

「万歳、万歳万歳。」

ひとりの少女が、緋のマントをメロスに捧げた。メロスは、まごついた。佳き友は、気をきかせて教へてやつた。

「メロス、君は、まつぱだかぢやないか。早くそのマントを着るがいい。この可愛い娘さんは、メロスの裸体を、皆に見られるのが、たまらなく口惜しいのだ。」

勇者は、ひどく赤面した。

(古伝説と、シルレルの詩から。)